

気候系監視速報（2025年（令和7年）2月）

気候系の特徴（2025年2月）

- ・エルニーニョ現象もラニーニャ現象も発生していない平常の状態と見られる。ラニーニャ現象に近い状態は弱まり始めている。対流活動は、平年と比べて、東南アジア、太平洋熱帯域の東部～南米北部付近で活発、インド洋、太平洋赤道域の西部～中部で不活発だった。
- ・対流活動に対応して、対流圏上層では、インド洋北部で低気圧性循環偏差、東アジア南東部で高気圧性循環偏差となった。
- ・500hPa 高度では、北極域の正偏差に伴って対流圏の極渦は分裂し、片方は北米北部～北大西洋北部、もう片方は東シベリア～北太平洋北部に南下した。
- ・寒帯前線ジェット気流は日本付近で南へ蛇行した。北太平洋では偏西風が平年より強かった。
- ・海面気圧では、シベリア高気圧、アリューシャン低気圧がともに平年に比べて強く、日本付近では冬型の気圧配置が強かった。
- ・日本の月平均気温は、西日本、沖縄・奄美でかなり低く、北日本で高かった。月降雪量は、東日本日本海側でかなり多く、西日本日本海側で多かった。

日本の天候（図1～3、表1）

平均気温：西日本、沖縄・奄美でかなり低く、北日本で高かった。東日本では平年並だった。

降水量：北・東日本日本海側で多かった。一方、東日本太平洋側でかなり少なく、西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美では少なかった。北日本太平洋側では平年並だった。

日照時間：東日本日本海側と沖縄・奄美では少なかった。東日本太平洋側ではかなり多く、北・西日本太平洋側では多かった。北日本日本海側、西日本日本海側では平年並だった。

天候経過：強い冬型の気圧配置によって寒気が流れ込んだ。このため、西日本と沖縄・奄美では平均気温がかなり低く、北・東日本日本海側では月降水量が多く、東日本日本海側と沖縄・奄美では月間日照時間が少なかった。月降雪量は、東日本日本海側ではかなり多く、西日本日本海側では多かった。一方、低気圧の影響が弱かった東日本太平洋側では月降水量がかなり少なく、西日本日本海側、西日本太平洋側と沖縄・奄美では少なかった。また、冬型の気圧配置に加えて高気圧の影響を受けやすかった東日本太平洋側では、月間日照時間がかなり多く、北・西日本太平洋側では多かった。

世界の天候

- ・世界の月平均気温偏差は $+0.47^{\circ}\text{C}$ （速報値）で、1891年の統計開始以降、2月として4番目に高い値となった。2月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約 $0.84^{\circ}\text{C}/100$ 年（速報値）である（図4）。
- ・主な異常天候発生地域は次のとおり（図5）。
 - インド南部及びその周辺、ブラジル南部～チリ中部で異常高温となった。
 - ヨーロッパ東部～中部で異常少雨となった。

海況（図6）

- ・太平洋赤道域の海面水温は、西部で正偏差、中部で負偏差となった。NINO.3海域の月平均海面水温偏差及び基準値との差はともに $+0.2^{\circ}\text{C}$ だった（図7）。
- ・北太平洋では、フィリピンの東海上～中部の亜熱帯や中緯度帯で顕著な正偏差、カリフォルニアの南西海上では顕著な負偏差となった。
- ・南太平洋では、中緯度帯の西部で顕著な正偏差となった。
- ・インド洋では、インド周辺で顕著な正偏差、アラビア海西部で顕著な負偏差となった。

- ・北大西洋では、亜熱帯や中緯度帯の東部で顕著な正偏差となった。
- ・南大西洋では、熱帯域の広い範囲で顕著な正偏差、中緯度帯で顕著な負偏差となった。

熱帯の対流活動と循環

- ・対流活動は、平年と比べて、東南アジア、太平洋熱帯域の東部～南米北部付近で活発、インド洋、太平洋赤道域の西部～中部で不活発だった（図8）。
- ・赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、インドネシア～南米付近を東進した（図9）。
- ・対流圏上層では、インド洋北部で低気圧性循環偏差、東アジア南東部で高気圧性循環偏差となった（図10）。
- ・対流圏下層では、太平洋西・中部で南北半球対の高気圧性循環偏差、太平洋東部で南北半球対の低気圧性循環偏差となった。
- ・海面気圧は、太平洋熱帯域で正偏差となった。南方振動指数は+0.7だった（図7）。

北半球の循環

- ・500hPa 高度（図11）より、北極域の正偏差に伴って対流圏の極渦は分裂し、片方は北米北部～北大西洋北部、もう片方は東シベリア～北太平洋北部に南下した。ヨーロッパ北部で正偏差、中東北部で負偏差が見られた。
- ・200hPa 風速（図12）より、寒帯前線ジェット気流は日本付近で南へ蛇行した。北太平洋では偏西風が平年より強かった。
- ・海面気圧（図13）より、シベリア高気圧、アリューシャン低気圧がともに平年に比べて強く、日本付近では冬型の気圧配置が強かった。
- ・850hPa 気温（図14）は、北極域で顕著な正偏差となった一方、東アジア、カナダ南部～米国北部、トルコ及びその周辺などで負偏差となった。
- ・30hPa 高度より、成層圏の極渦は平年より強かった。

南半球の循環

- ・500hPa 高度より、ニュージーランドの東～南米の南東で波列状の偏差パターンが見られた。
- ・海面気圧は、概ね 500hPa 高度に対応した偏差パターンとなった。

帯状平均場

- ・帯状平均した対流圏の東西風は、両半球の亜熱帯域と北緯 45 度以北で東風偏差、北緯 40 度、南緯 40 度で西風偏差となった。北半球の極夜ジェット気流は平年に比べて強かった。
- ・帯状平均した対流圏の気温は、北半球中緯度を除き、広い範囲で正偏差となった。北半球高緯度の成層圏で負偏差となった。

北半球の積雪と海水

- ・衛星観測による北半球の積雪日数は、平年と比べて、中国北東部で多く、中国西部、中央アジア西部で少なかった。
- ・北極域の海水面積は、2月としては1979年以降で最も少なかった。特にバレンツ海、ラブラドル海などで平年と比べて少なかった（[米国雪氷データセンター](#)）。

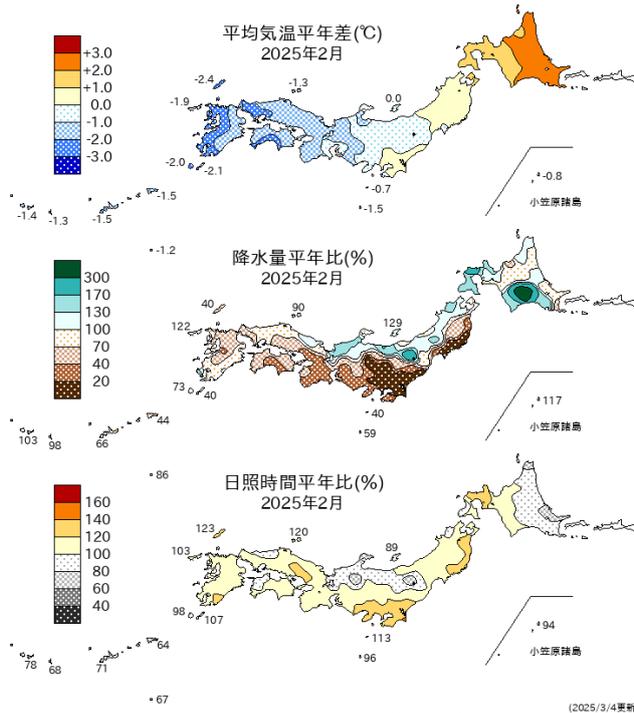


図1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の平年差(比)
(2025年2月)
平年値は1991~2020年の平均値。

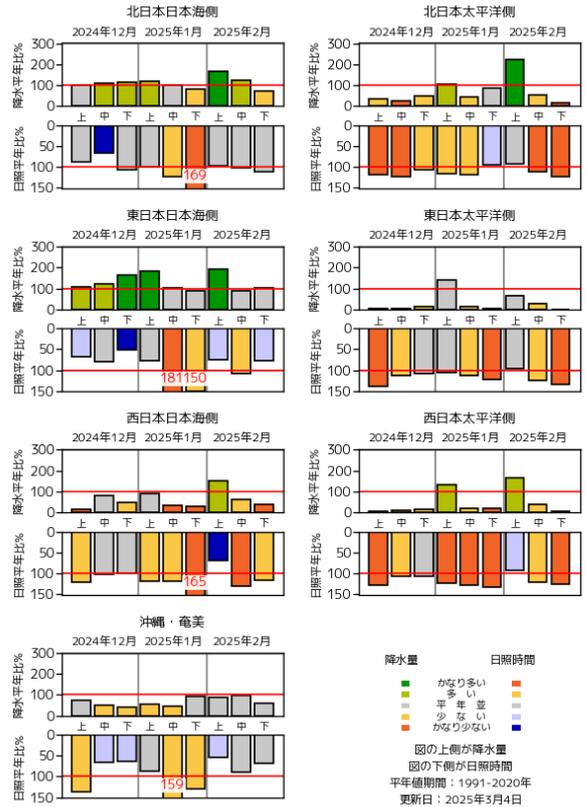


図2 旬降水量及び旬間日照時間地域平均平年比の時系列(2024年12月~2025年2月)
それぞれの上側が降水量(%), 下側が日照時間(%)。
平年値は1991~2020年の平均値。

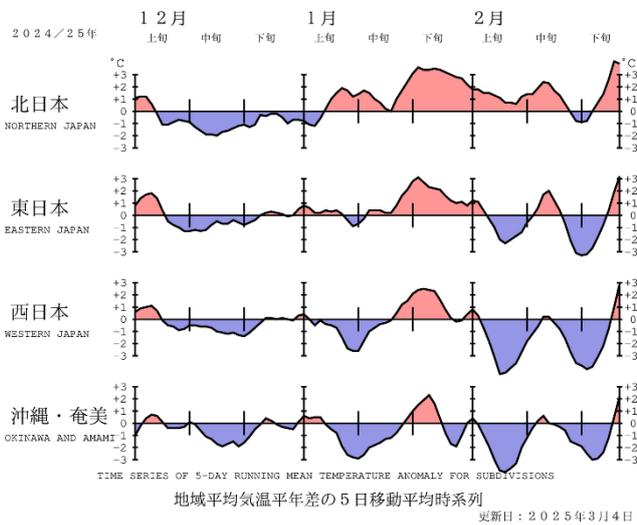


図3 地域平均気温平年差の5日移動平均時系列(2024年12月~2025年2月)
平年値は1991~2020年の平均値。

表1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の地域平均平年差(比)(2025年2月)
平年値は1991~2020年の平均値。

地域平均平年差(比)と階級 2025年02月

	気温 平年差 ℃(階級)	降水量 平年比 %(階級)	日照時間 平年比 %(階級)
北日本	+1.3 (+)	103 (0) 日 125 (+) 太 84 (0)	107 (+) 日 104 (0) 太 109 (+)
東日本	-0.5 (0)	49 (-)* 日 132 (+) 太 28 (-)*	111 (+) 日 87 (-) 太 117 (+)*
西日本	-1.8 (-)*	66 (-) 日 78 (-) 太 56 (-)	110 (+) 日 106 (0) 太 112 (+)
沖縄・奄美	-1.4 (-)*	76 (-)	71 (-)

階級表示
(-) : 低い(少ない)、(0) : 平年並、(+) : 高い(多い)、
(*) は、かなり低い(少ない)、かなり高い(多い)を表す。

地域表示

日 : 日本海側、太 : 太平洋側

本文中の北・東・西日本の降水量・日照時間の特徴は、日本海側・太平洋側の階級に基づいて記述している。

世界の2月平均気温偏差

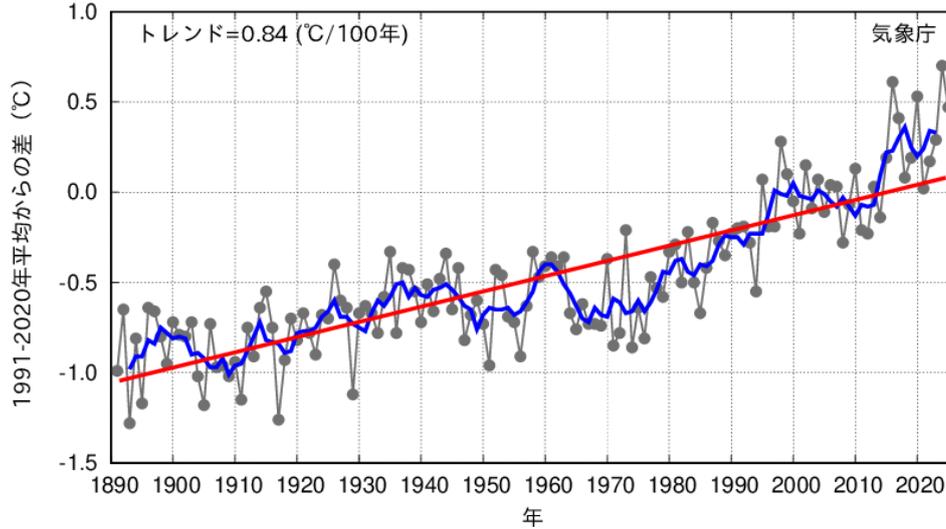


図4 2月の世界の月平均気温偏差の経年変化（1891～2025年：速報値）
 細線（黒）：各年の平均気温の基準値からの偏差、太線（青）：偏差の5年移動平均値、直線（赤）：長期変化傾向。
 基準値は1991～2020年の平均値。

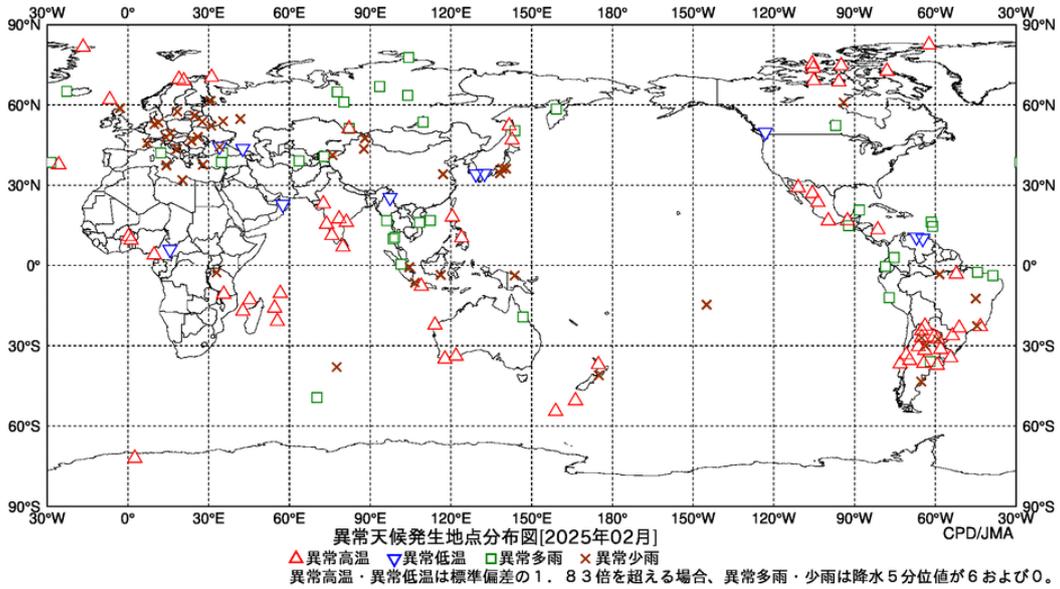


図5 異常天候発生日点分布図（2025年2月）
 △：異常高温 ▽：異常低温 □：異常多雨 ×：異常少雨

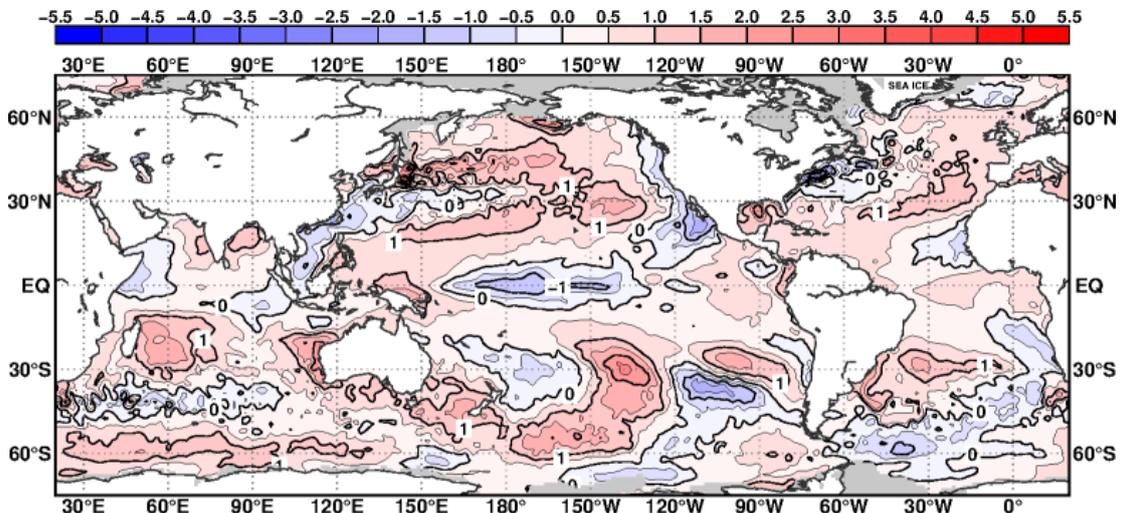


図6 月平均海面水温年差（2025年2月）
 等値線の間隔は0.5℃毎。灰色陰影は海水域を表す。平年値は1991～2020年の平均値。

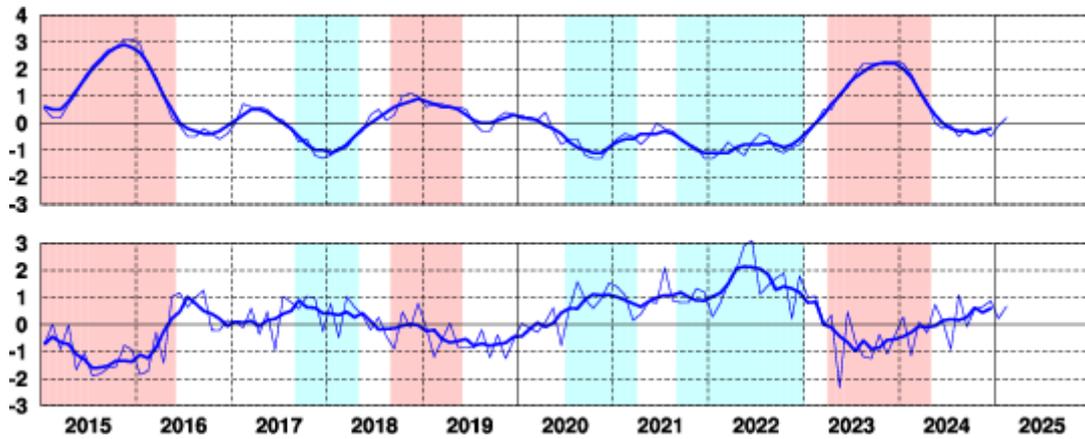


図7 エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差(°C)(上)と南方振動指数(下)の推移
 細線は月平均値、太線は5か月移動平均値を示す(海面水温の基準値はその年の前年までの30年間の各月の平均値、南方振動指数の平均値は1991~2020年の平均値)。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

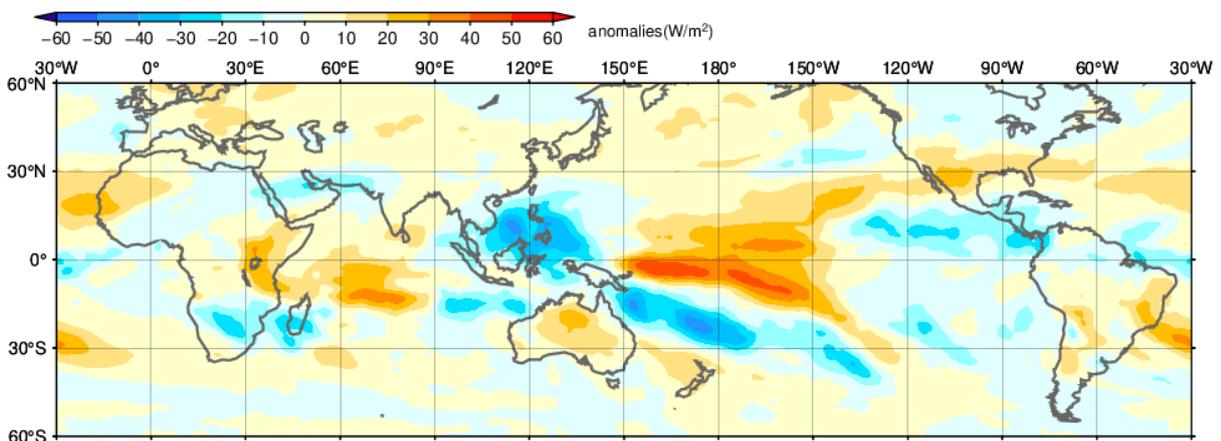


図8 月平均外向き長波放射量(OLR) 平年差(2025年2月)
 陰影の間隔は10W/m²毎。平年値は1991~2020年の平均値。米国海洋大気庁(NOAA)気候予測センター(CPC)より提供されたBlended OLRを用いて作成。

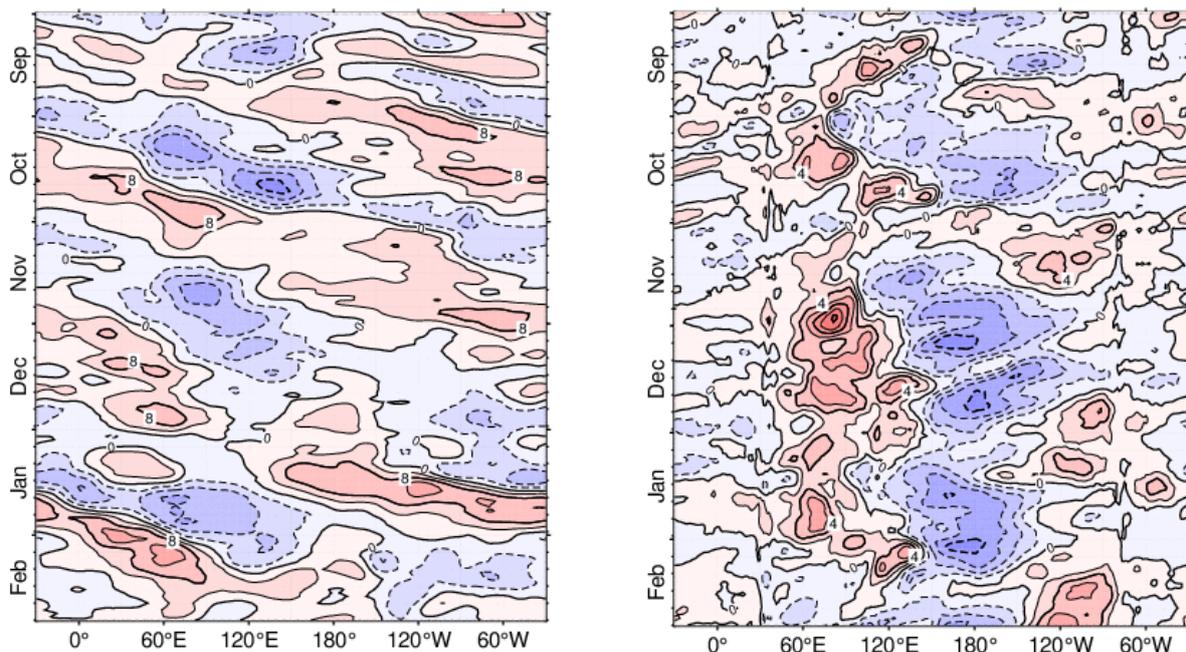


図9 赤道付近(5°N~5°S)の5日移動平均200hPa速度ポテンシャル平年差(左)、850hPa東西風平年差(右)の時間・経度断面図(2024年9月~2025年2月)
 等値線の間隔は、 $4 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 毎(左)、2m/s 毎(右)。平年値は1991~2020年の平均値。

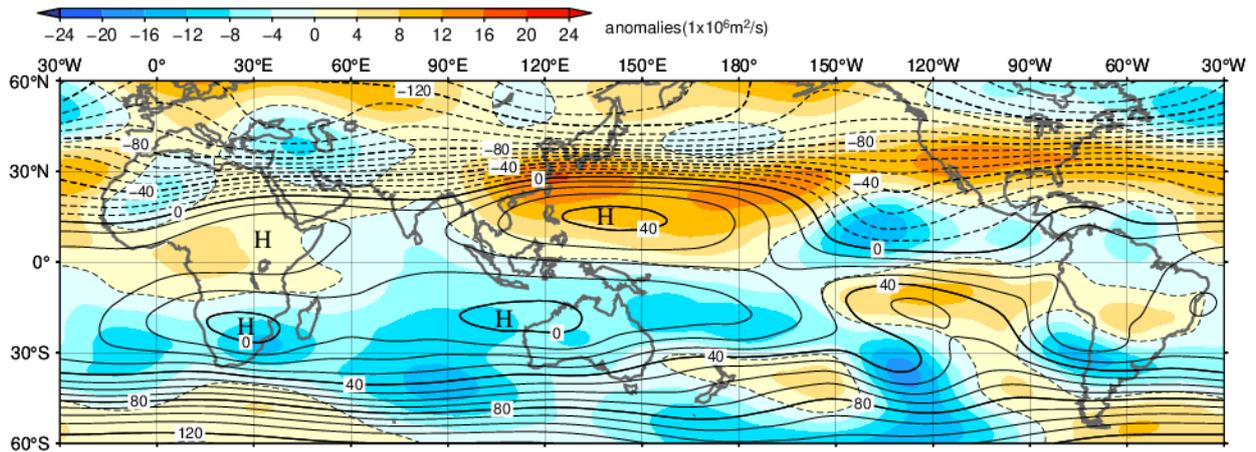


図 10 月平均 200hPa 流線関数・平年差 (2025 年 2 月)
等値線の間隔は $10 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 毎。陰影は平年差。平年値は 1991~2020 年の平均値。

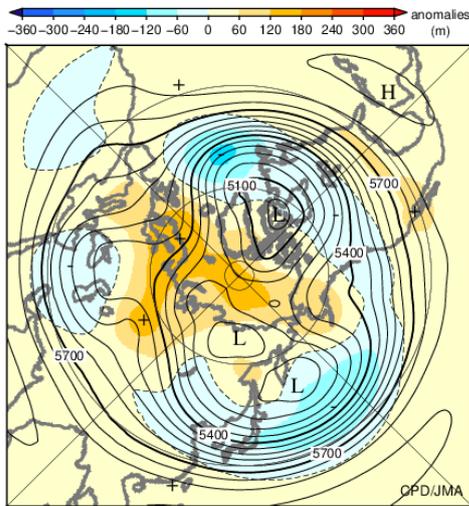


図 11 北半球月平均 500hPa 高度・平年差 (2025 年 2 月)
等値線の間隔は 60m 毎。陰影は平年差。平年値は 1991~2020 年の平均値。

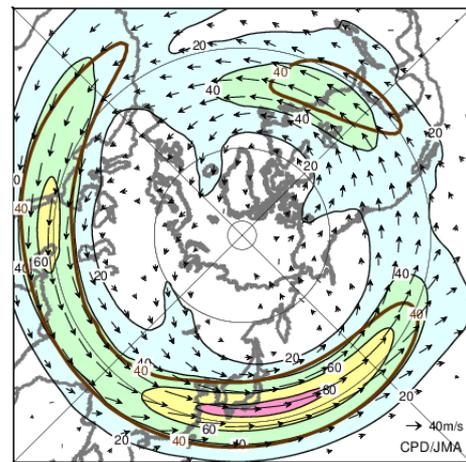


図 12 北半球月平均 200hPa 風速・風ベクトル (2025 年 2 月)
等値線の間隔は 20m/s 毎。平年の 40m/s 毎の等値線を茶色で表す。平年値は 1991~2020 年の平均値。

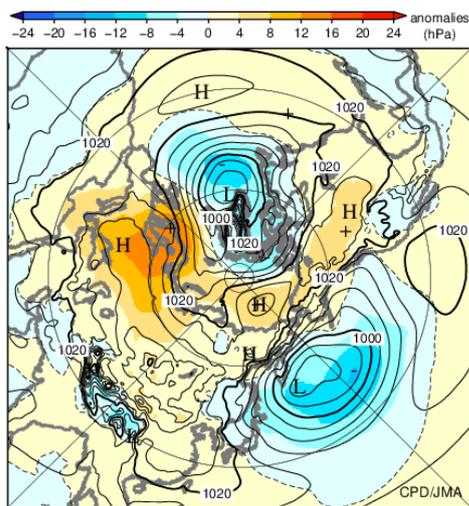


図 13 北半球月平均海面気圧・平年差 (2025 年 2 月)
等値線の間隔は 4hPa 毎。陰影は平年差。平年値は 1991~2020 年の平均値。

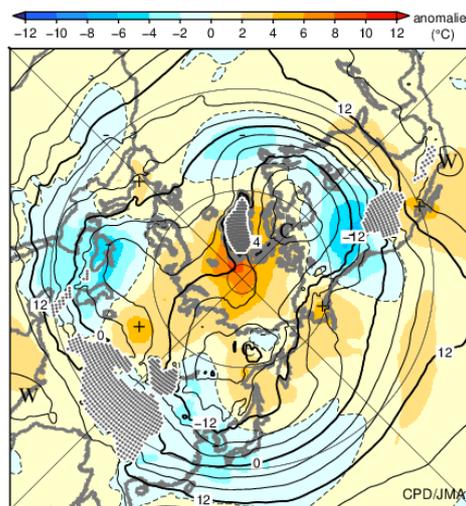


図 14 北半球月平均 850hPa 気温・平年差 (2025 年 2 月)
等値線の間隔は 4°C 毎。陰影は平年差。平年値は 1991~2020 年の平均値。

気候系に関する詳細な情報は、気象庁ホームページ内「地球環境・気候」の「気候情報 (異常気象、最近の天候、地球温暖化等に関する情報)」の各項目に掲載しています。気象庁ホームページ内の「地球環境・気候」の URL は次の通りです。 <https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/menu/index.html>

本件に関する問い合わせ先：気象庁 大気海洋部 気候情報課



【地球環境・気候】

季節の気候系の特徴（2024年12月～2025年2月）

- ・太平洋赤道域の海面水温は、西部で顕著な正偏差、中部で負偏差となり、ラニーニャ現象に近い状態であった。
- ・対流活動は、平年と比べて、インド洋東部～東南アジア、中米南部付近で活発、アフリカ～インド洋中部、太平洋赤道域の西部～中部で不活発だった。
- ・活発な対流活動に対応して、対流圏上層では、インド洋東部で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。その下流側の日本付近で低気圧性循環偏差となった。
- ・寒帯前線ジェット気流は日本付近で南に蛇行した。北太平洋では偏西風が強かった。
- ・海面気圧では、シベリア高気圧、アリューシャン低気圧ともに平年に比べて強く、日本付近では冬型の気圧配置が強かった。
- ・日本の冬の平均気温は、沖縄・奄美でかなり低く、西日本で低かった一方、北日本では高かった。冬の降水量は、東・西日本太平洋側では1946/47年冬の統計開始以降で冬として1位、西日本日本海側では1位タイの少雨となった。一方、東日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側では多かった。冬の降雪量は西日本日本海側で多かった。

日本の天候（図S1、表S1）

- ・平均気温：寒気の影響を受けやすかった沖縄・奄美でかなり低く、西日本で低かった。一方、北日本では高かった。
- ・降水量：低気圧の影響を受けにくかった北・東・西日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美でかなり少なかった。特に、東・西日本太平洋側では1946/47年冬の統計開始以降で冬として1位、西日本日本海側では1位タイの少雨となった。一方、冬型の気圧配置の影響を受けやすかった東日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側では多かった。降雪量は、西日本日本海側で多かった。
- ・日照時間：冬型の気圧配置の影響や高気圧に覆われて晴れの日が多かった北・東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり多かった。また、北日本日本海側では多かった。特に、東日本太平洋側では1946/47年冬の統計開始以降で冬として1位、北・西日本太平洋側では1位タイの多照となった。一方、東日本日本海側では少なかった。

世界の天候（図S2）

- ・東シベリア西部、西シベリア及びその周辺、インド、アルゼンチン北部及びその周辺で異常高温となった。
- ・西シベリア及びその周辺、中米南部～ペルー西部で異常多雨となった。
- ・本州～朝鮮半島、中東北西部～ヨーロッパ西部、アルゼンチン北部及びその周辺で異常少雨となった。

海況（図S3）

- ・太平洋赤道域の海面水温は、西部で顕著な正偏差、中部で負偏差となった。
- ・北太平洋では、亜熱帯や中緯度帯の広い範囲で顕著な正偏差、カリフォルニアの南西海上では顕著な負偏差となった。
- ・南太平洋では、中緯度帯の西部で顕著な正偏差となった。
- ・インド洋では、ベンガル湾で顕著な正偏差、アラビア海西部で顕著な負偏差となった。
- ・北大西洋では、亜熱帯や中緯度帯の東部で顕著な正偏差となった。
- ・南大西洋では、熱帯域の広い範囲で正偏差、中緯度帯で顕著な負偏差となった。

熱帯の対流活動と循環

- ・対流活動は、平年と比べて、インド洋東部～東南アジア、中米南部付近で活発、アフリカ～インド洋中部、太平洋赤道域の西部～中部で不活発だった（図S4）。
- ・対流圏上層では、インド洋東部で南北半球対の高気圧性循環偏差、日本付近で低気圧性循環偏差となった（図S5）。
- ・対流圏下層では、インド洋で南北半球対の低気圧性循環偏差、太平洋西・中部で南北半球対

の高気圧性循環偏差となった。

- 海面気圧は、インド洋～インドネシアで負偏差、太平洋熱帯域で正偏差となった。

北半球の循環

- 500hPa 高度 (図 S6) は、ユーラシア大陸北部～北米北西部で正偏差、日本付近～アリューシャンの南、北米北東部～その東海上で負偏差となった。
- 200hPa 風速 (図 S7) より、寒帯前線ジェット気流は日本付近で南に蛇行した。北太平洋では偏西風が強かった。
- 海面気圧 (図 S8) より、シベリア高気圧、アリューシャン低気圧ともに平年に比べて強く、日本付近では冬型の気圧配置が強かった。
- 850hPa 気温 (図 S9) は、北極域で正偏差となった一方、東アジア南東部、北米中部～東部、中東で負偏差となった。

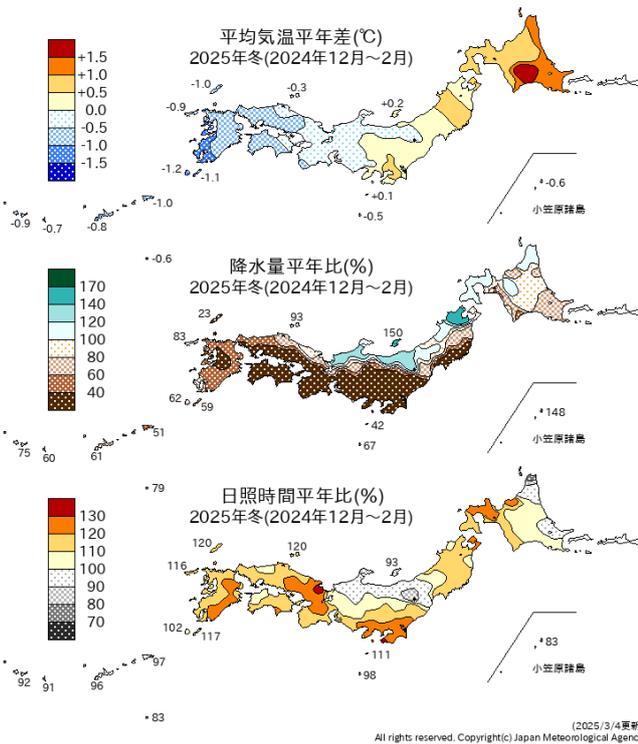


図 S1 3 か月平均気温、3 か月降水量、3 か月間日照時間の年平均差 (比) (2024 年 12 月～2025 年 2 月) 平年値は 1991～2020 年の平均値。

表 S1 3 か月平均気温、3 か月降水量、3 か月間日照時間の地域平均年平均差 (比) (2024 年 12 月～2025 年 2 月) 平年値は 1991～2020 年の平均値。

地域平均年平均差 (比) と階級 2024/12～2025/2

	気温 年平均差 ℃ (階級)	降水量 年平均比 % (階級)	日照時間 年平均比 % (階級)
北日本	+0.7 (+)	83 (-)	110 (+)*
		日 110 (+)	日 108 (+)
		太 60 (-)*	太 111 (+)*
東日本	+0.1 (0)	47 (-)*	112 (+)*
		日 130 (+)*	日 95 (-)
		太 26 (-)*	太 117 (+)*
西日本	-0.7 (-)	47 (-)*	117 (+)*
		日 57 (-)*	日 116 (+)*
		太 38 (-)*	太 119 (+)*
沖縄・奄美	-0.8 (-)*	66 (-)*	94 (0)

階級表示

(-) : 低い(少ない)、(0) : 平年並、(+) : 高い(多い)、()*は、かなり低い(少ない)、かなり高い(多い)を表す。

地域表示

日 : 日本海側、太 : 太平洋側

本文中の北・東・西日本の降水量・日照時間の特徴は、日本海側・太平洋側の階級に基づいて記述している。

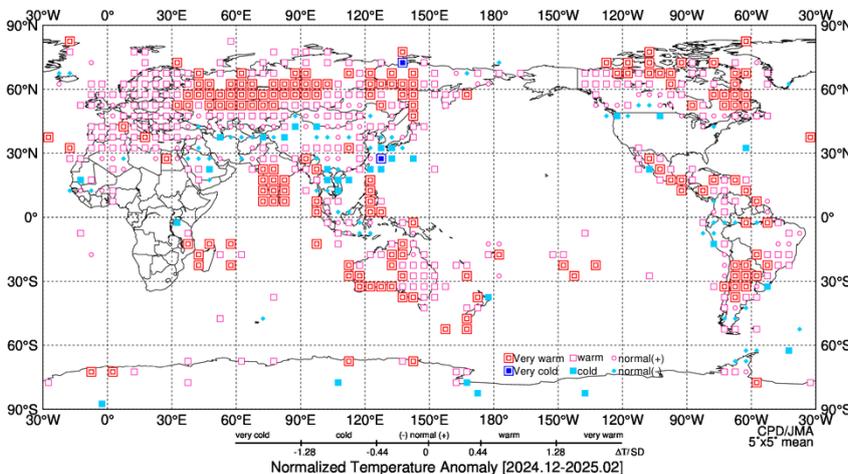
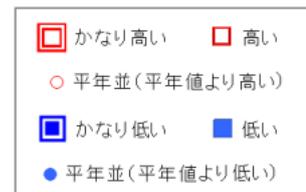
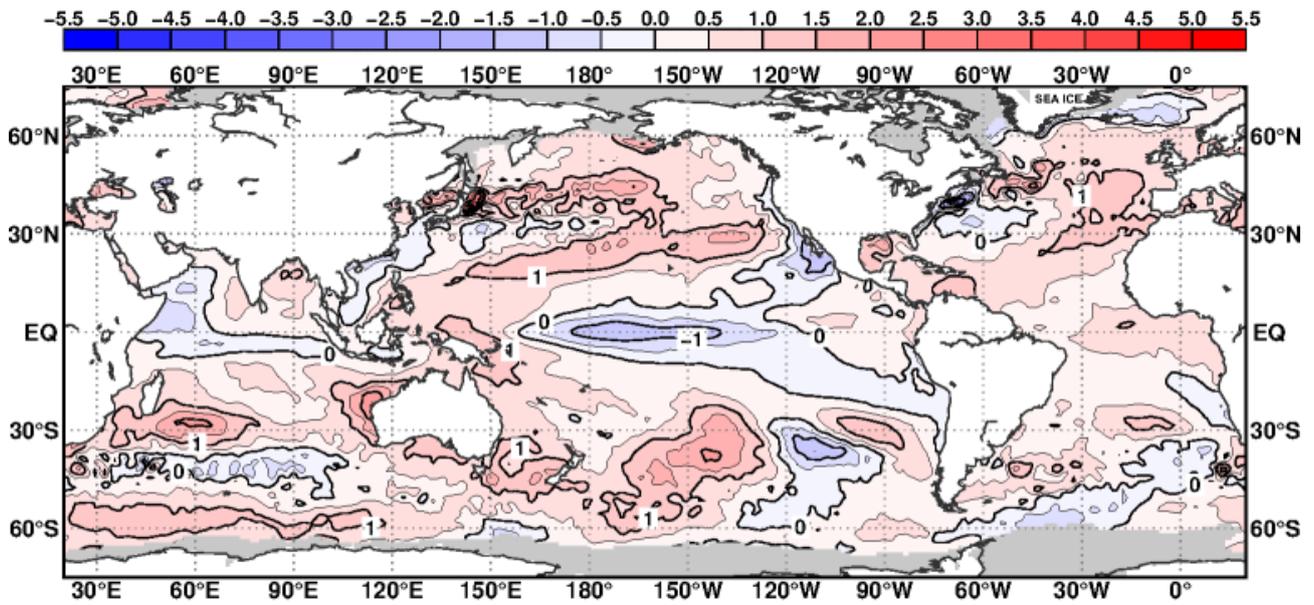


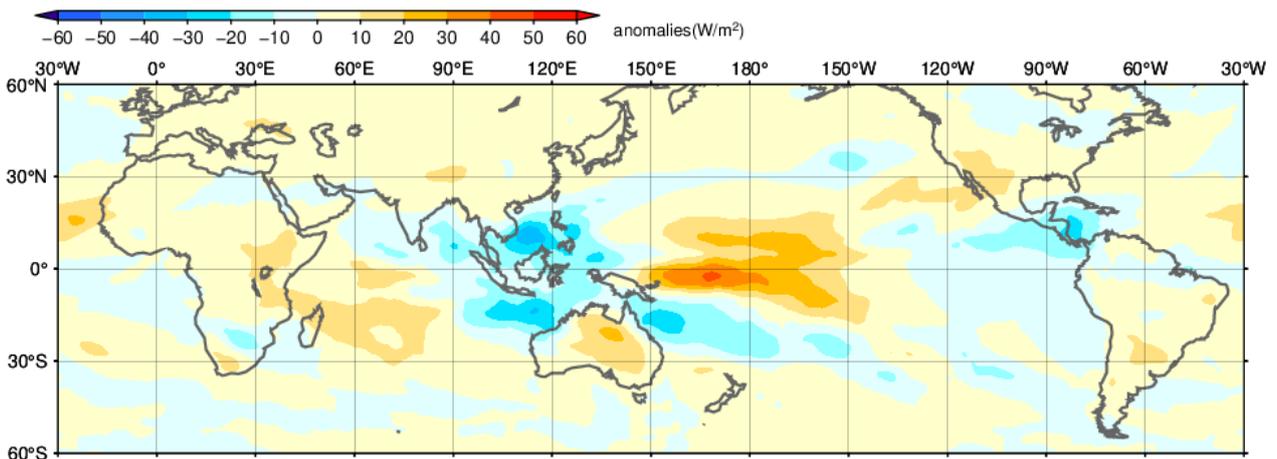
図 S2 3 か月平均気温規格化年平均差分布図 (2024 年 12 月～2025 年 2 月)

3 か月平均気温の年平均差を標準偏差で規格化した値を緯度・経度 5 度格子で平均し、階級別に表した。平年値は 1991～2020 年の平均値。

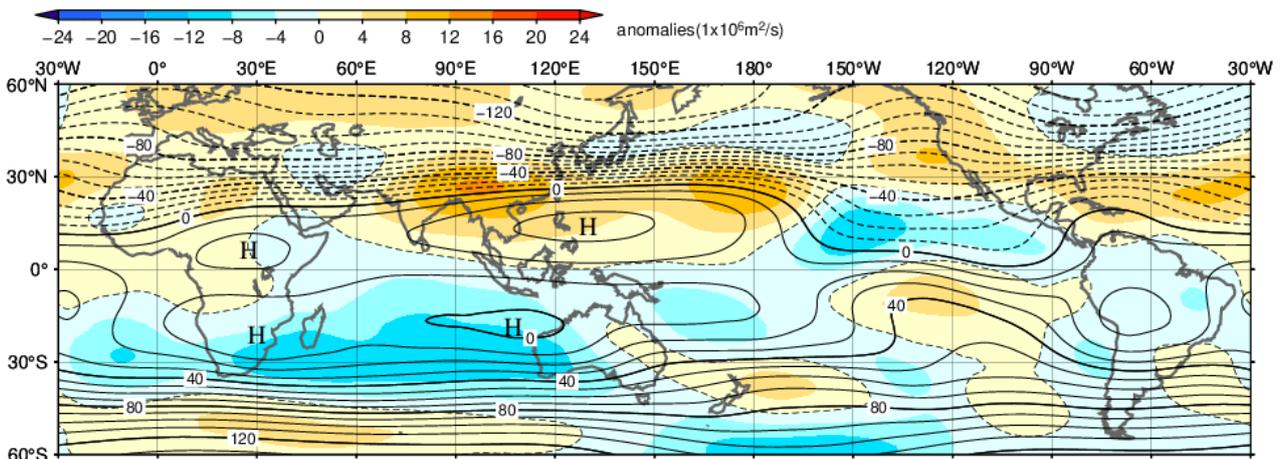




図S3 3か月平均海面水温平年差（2024年12月～2025年2月）
等値線の間隔は0.5°C毎。灰色陰影は海氷域を表す。平年値は1991～2020年の平均値。



図S4 3か月平均外向き長波放射量(OLR)平年差（2024年12月～2025年2月）
陰影の間隔は10W/m²毎。平年値は1991～2020年の平均値。米国海洋大気庁（NOAA）気候予測センター（CPC）より提供されたBlended OLRを用いて作成。



図S5 3か月平均200hPa流線関数・平年差（2024年12月～2025年2月）
等値線の間隔は10x10⁶m²/s毎。陰影は平年差。平年値は1991～2020年の平均値。

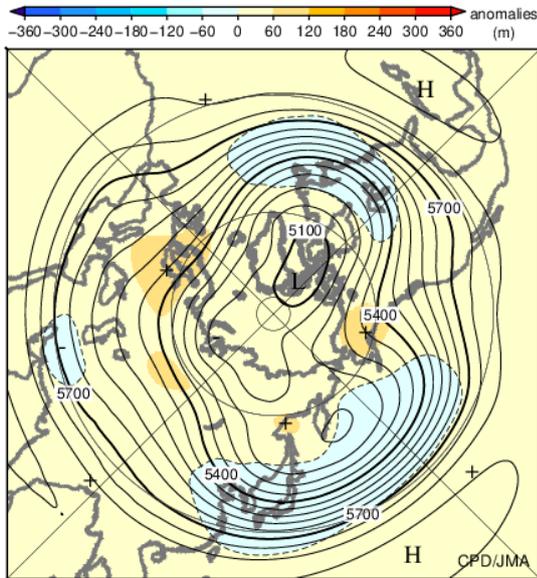


図 S6 北半球3か月平均500hPa高度・平年差
(2024年12月～2025年2月)
等値線の間隔は60m毎。陰影は平年差。平年値は1991～2020年の平均値。

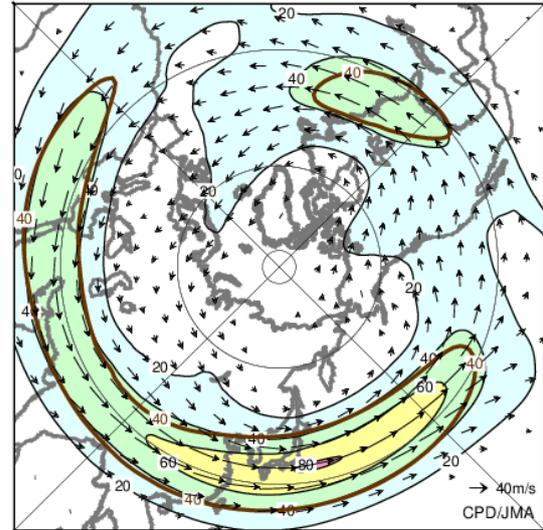


図 S7 北半球3か月平均200hPa風速・風ベクトル
(2024年12月～2025年2月)
等値線の間隔は20m/s毎。平年の40m/s毎の等値線を茶色で表す。平年値は1991～2020年の平均値。

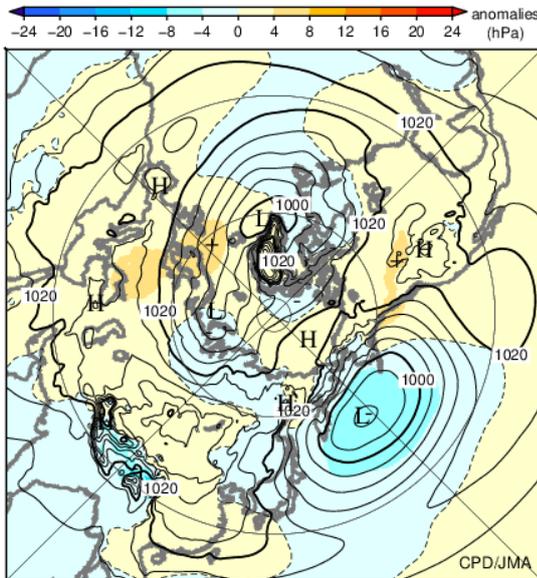


図 S8 北半球3か月平均海面気圧・平年差
(2024年12月～2025年2月)
等値線の間隔は4hPa毎。陰影は平年差。平年値は1991～2020年の平均値。

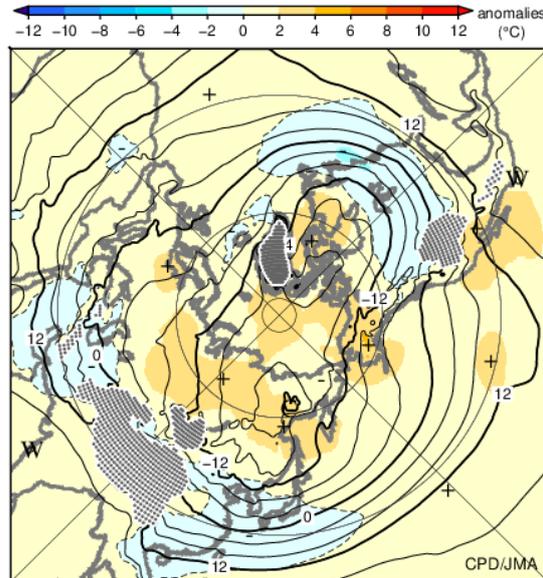


図 S9 北半球3か月平均850hPa気温・平年差
(2024年12月～2025年2月)
等値線の間隔は4℃毎。陰影は平年差。平年値は1991～2020年の平均値。

気候系に関する詳細な情報は、気象庁ホームページ内「地球環境・気候」の「気候情報（異常気象、最近の天候、地球温暖化等に関する情報）」の各項目に掲載しています。気象庁ホームページ内の「地球環境・気候」のURLは次の通りです。 <https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/menu/index.html>

本件に関する問い合わせ先：気象庁 大気海洋部 気候情報課



【地球環境・気候】